

[8月8日(木)]

■行政説明

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課長

大山真未様

■アトラクション

弘前市立北小学校 ねふた集会

■講演

『発達障害の理解と支援

～特性と「障害」を区別することの重要性～』

国立大学法人 筑波大学 人間系長

宮本信也様

弘前のひと Art

な ら よし とも
奈 良 美 智

画家・彫刻家。世界的に評価されている現代美術家で、ニューヨーク近代美術館（MOMA）やロサンゼルス現代美術館に作品が所蔵されるなど日本の現代美術の第二世代を代表するひとり。にらみつけるような目の子供や動物をモチーフにした絵画、ドローイング、彫刻作品そして大型インスタレーションで知られる。





アトラクション

8月8日(木) 14:10-14:25 弘前文化センター ホール

弘前市立北小学校 ねぶた集会

東北三大祭りの一つとして名前の知られている青森の「ねぶた」祭りですが、弘前では「ねぶた」とよばれています。今年も8月1日から7日まで全国から大勢の観光客を集めました。

本日、皆様にご披露するのは弘前市立北小学校の「ねぶた」です。弘前市立北小学校は平成3年に創立された学校ですが、その創立の時からこれまで、この津軽の伝統を受け継ぐ「ねぶた集会」を行ってきました。全校を縦割り班にして2つの特別支援学級の子どもたちも一緒に喜んで活動しています。実際のねぶたはこのステージにおさまりきれない大きさですが、お囃子やかけ声などもあわせて「弘前ねぶた」の雰囲気を感じていただきたいと思います。





講演

8月8日(木) 14:30-16:20 弘前文化センター ホール

■演題 『発達障害の理解と支援

～特性と「障害」を区別することの重要性～』

■講師 国立大学法人 筑波大学 人間系長 宮本 信也 様



■講師プロフィール

宮本信也 (みやもとしんや)

昭和27年9月20日生

青森県弘前市出身

筑波大学人間系教授・医学博士・小児科医

専門領域：発達行動小児科学

◎主な診療・研究テーマ：発達障害、特に自閉症スペクトラム障害の認知・心理特性、子ども虐待に対する診療体制の確立

◎学 歴：1978年3月 金沢大学医学部卒業

◎職 歴：1978年5月より自治医科大学小児科研修医 その後、同助手、講師を経て
1991年より筑波大学心身障害学系助教授

1998年より同教授

2004年 大学法人化により現在の所属

2010～2011年 筑波大学附属聴覚特別支援学校校長兼務

2012年～ 筑波大学人間系長（大学執行役員兼務）

◎公 職：厚生労働省社会保障審議会専門委員

厚生労働省脳死下での臓器提供事例に係る検証会議委員

茨城県特別支援教育推進会議委員

茨城県発達障害者支援連絡協議会委員

◎役員等：日本小児精神神経学会理事長

日本小児心身医学会理事

日本LD学会常任理事・研究委員会委員長

日本子ども虐待防止学会理事・学術集会支援委員会委員長

日本発達障害学会理事・編集委員会常任委員

日本心身医学会代議員

◎著書・論文（最近のもの）

発達障害の概念と捉え方、小児内科 44 (5) : 671-675, 2012.

発達障害の二次障害をどのように捉えるか. Pharma Medica 30 (4) : 21-24, 2012

子どもの不安の表れ方. 教育と医学59 (19) : 932-939, 2011.

ADHD 臨床の概要. Pharma Medica 28 (11) : 9-12, 2010.

発達障害と不登校、東條吉邦・大六一志・丹野義彦編：

発達障害の臨床心理学、東京大学出版会、243-254、2010

発達障害とその周辺への支援 思春期にみられる問題とその支援.

日本小児科医会会報 28: 79-82, 2009.

不安障害、強迫性障害. 小児内科 41supl. : 810-817, 2009

[8月9日(金)]

研究協議（分科会）

分科会・課題設定に当たって

第1分科会（ホール）

「全ての教員が取り組む特別支援教育」

第2分科会（大会議室[2F]）

「一人一人のニーズに応じた特別支援教育の支援体制」

第3分科会（中会議室[2F]）

「関係機関との連携で進める特別支援教育」

弘前のひと Sports



さい とう はる か
齋 藤 春 香

北京オリンピック（2008年）での女子ソフトボール日本代表監督。悲願の金メダルを獲得。自身もプレイヤーとしてアトランタ（4位）、シドニー（銀）、アテネ（銅）の3回のオリンピックに出場した。





分科会・課題設定に当たって

第49回全国研究協議会北海道大会において、熱心な研究協議が行われ、各分科会で、特別支援教育の喫緊の課題と言える3つのテーマに基づいた実践報告がなされ、改めて設置学校長としての指導力の発揮による取り組みの必要性や抱える課題が多岐にわたる事などについて意見を交換する事ができた。

これを受けて、第50回全国研究協議会青森大会においては、北海道大会での成果・課題を引き継ぐとともに、これまでの本県における特別支援教育の成果・課題をもとに、すべての教員が取り組む特別支援教育、一人一人のニーズに対応した特別支援教育の支援体制、関係機関との連携で進める特別支援教育などに焦点を当てた分科会テーマを設定し、関連した6つの実践報告を行うこととした。

■第1分科会のテーマ「全ての教員が取り組む特別支援教育」

通常の学級担任にも、障害の特性やそれに配慮した指導・支援、そして個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成と活用に関わっての知識が必要とされ、校内支援委員会の活用や、通常の学級における特別支援教育の視点を加えた授業力の向上など教員の資質向上を図る取り組みが必要とされている。

◎実践報告1-1

「ユニバーサルデザインの学習を目指して」

（報告者）秋田県 横手市立朝倉小学校 校長 永 沢 敏 昭

特別支援教育は、全ての子どもに安心感と分かりやすさを提供し、個に応じた指導を一層充実させる教育である。ユニバーサルデザインの授業づくりのためにも、特別支援教育の専門的な知識を身に付け、それを生かすことができるように教員の意識と資質向上を図ることが欠かせない。

◎実践報告1-2

「通常の学級担任による特別支援教育と校長の働きかけ」

（報告者）青森県 三沢市立木崎野小学校 校長 山 田 春 雄

通常の学級担任による特別支援教育が重要視されているものの、特別支援教育に対する意識の違いは大きい。通常の学級担任の意識の変化や、個別の指導計画による指導実践に対する校長の働きかけが極めて重要である。

■第2分科会のテーマ「一人一人のニーズに応じた特別支援教育の支援体制」

障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応えるために、各校では校内体制整備や教育内容の編成など行ってきたが、多くの成果や新たな課題も見えてきた。そのため教育的ニーズに的確に応えるための取り組みが必要とされている。

◎実践報告2-1

「子ども一人一人をとことん大切に、本気モードで支援する教育の実現に向けた校長の在り方」

（報告者）岩手県 盛岡市立青山小学校 校長 伊 藤 正 幸

限られた教員人材の中でとことん子どもを大切に、教員や保護者等の支援教育に対する意識改革や指導する教員を孤立させないためには、学校運営の中核をなす校内特別支援教育コーディネーターを育てる校長の在り方が大きく関わってくる。

◎実践報告2-2

「教師の専門性を高めるとともに、相互に支え合って子ども一人一人に適切に対応するための体制づくりと校長の役割」

（報告者）青森県 青森市立浪打中学校 校長 熊 谷 せい子

障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応えるためには、特別支援教育に関する専門的な知識や指導技術が必要である。中学校の特別支援学級の課題解決のためには、校内の支援体制づくりは勿論、学校を超えた結びつきを強め、相互に研修し合い専門性を向上させていくための体制づくりが必要である。

■第3分科会のテーマ「関係機関との連携で進める特別支援教育」

障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援を行っていくには学校教育のみならず、家庭や医療・福祉・労働等関係機関との連携の充実を図るための取り組みが必要とされている。

◎実践報告3-1

「学校経営の柱としての特別支援教育の推進～関係機関との連携とユニバーサルデザインの授業づくりを通して～」

(報告者) 宮城県 仙台市立大和小学校 校長 佐藤 貢

特別支援教育を学校経営の柱とすることは、全ての児童生徒のニーズに応じた教育活動を保障していくことである。そのためには、関係機関との連携によるより専門的な指導が求められる。

◎実践報告3-2

「関係機関と連携して高める教員の指導力とコーディネート力」

(報告者) 青森県 八戸市立根城小学校 校長 赤石 和枝

特別な支援を要する子どものよりよい成長のためには、子ども一人一人への指導・支援を、子どもの将来像も考慮した上で行うことが大切である。そのためには、管理職や特別支援教育コーディネーターを含めたすべての教職員が、関係機関との連携により適切な情報を得て、指導力やコーディネート力を高める必要がある。

<分科会一覧>

	第1分科会 (ホール)	第2分科会 (大会議室)	第3分科会 (中会議室)
テ ー マ	「全ての教員が取り組む 特別支援教育」	「一人一人のニーズに応じた 特別支援教育の支援体制」	「関係機関との連携で進める 特別支援教育」
実践報告1	「ユニバーサルデザインの 学習を目指して」	「子ども一人一人をとことん 大切にし、本気モードで支 援する教育の実現に向けた 校長の在り方」	「学校経営の柱としての特別支援 教育の推進～関係機関との連携 とユニバーサルデザインの授業 づくりを通して～」
報 告 者	秋田県横手市立朝倉小学校 校長 永 沢 敏 昭	岩手県盛岡市立青山小学校 校長 伊 藤 正 幸	宮城県仙台市立大和小学校 校長 佐 藤 貢
司 会 者	秋田県大仙市立西仙北小学校 校長 鈴 木 恒 久	岩手県盛岡市立手代森小学校 校長 菅 原 文 彦	宮城県仙台市立馬場小学校 校長 篠 原 洋 治
実践報告2	「通常の学級担任による特別 支援教育と校長の働きかけ」	「教師の専門性を高めるとと もに、相互に支え合って子 ども一人一人に適切に対応 するための体制づくりと校 長の役割」	「関係機関と連携して高める 教員の指導力とコーディネ ート力」
報 告 者	青森県三沢市立木崎野小学校 校長 山 田 春 雄	青森県青森市立浪打中学校 校長 熊 谷 せい子	青森県八戸市立根城小学校 校長 赤 石 和 枝
司 会 者	青森県十和田市立十和田中学校 校長 小 川 和 俊	青森県青森市立沖館小学校 校長 小 形 範 雄	青森県八戸市立南浜中学校 校長 佐 藤 正 暢
記 録 者	青森県北津軽郡鶴田町立菖蒲川小学校 校長 木 村 恵 子 青森県五所川原市立五所川原第四中学校 校長 三 浦 郁 夫	青森県三戸郡南部町立福田小学校 校長 三 浦 勉 青森県東津軽郡外ヶ浜町立三厩小学校 校長 渡 邊 清 治	青森県下北郡大間町立奥戸小学校 校長 木 村 正 青森県黒石市立浅瀬石小学校 校長 前 田 了 二
講 評 者	青森県立第一養護学校 校長 川 村 泰 弘	弘前学院大学福祉学部 講師 立 花 茂 樹	青森おおぞら学園 園長 鳴 海 明 敏
運 営 者	青森県弘前市立修斉小学校 校長 相 馬 隆 子	青森県弘前市立岩木小学校 校長 工 藤 晴 久	青森県弘前市立大和沢小学校 校長 幸 田 龍 一
世 話 人	青森県弘前市立高杉小学校 校長 佐 藤 昭	青森県弘前市立西小学校 校長 山 上 倫 史	青森県弘前市立石川小学校 校長 平 野 祐 一

ユニバーサルデザインの 学習を目指して

秋田県横手市立朝倉小学校 校長 永沢 敏昭

1 はじめに

平成24年12月、文部科学省から「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果が公表された。それによると、学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒が全体の6.5%、つまり、発達障害の可能性のある公立小中学生が全国で推定61万人あまり、1クラスに平均すると2~3人がいることになる。しかも、児童数が減っているのに、特別支援学級は増加傾向さえ見せている。

特別支援教育が教育の原点といわれるのは、一人一人の特性を知り、個に応じた指導を目的にしているからであり、それは、通常学級も同様である。つまり、ユニバーサルデザインの視点での授業作り、学級・学校経営をすることによって、能力や障害の程度にかかわらず、全ての子供たちにとって居心地のよい学級、分かる授業を目指すことができると考える。このようなことから、全教員が特別支援教育に対する理解をよりいっそう深めるとともに、それに基づいた実践を重ねていく必要があると考える。

2 本校や横手市の状況

○ 特別支援教育地域センターが併設

本校は、特別支援教育地域センターとして、アドバイザーが常駐するとともに「ことばの教室」と「まなびの教室」が併設されている。そのため、困り感のある子どもへの支援体制が整っており、すぐに相談してアドバイスを受けたり、必要に応じて保護者の同意の下、あまり間を置かずに検査を受けたり、校内通級して対応したりできる環境にある。

[24年度実績]

ことばの教室	27人	うち校内通級	5人
まなびの教室	30人	うち校内通級	10人

校内通級の子どもたちについては、担任が支援計画（ファイル）を書くことになっている。また、子どもや保護者への具体的な対応等については、長年のキャリアをもつコーディネーターから、専門的な知識と豊富な経験に裏打ちされた適切なアドバイスを気軽に受けることができる。

さらに、諸行事などの際には、特別支援担当教員から、特別支援学級に所属する子どもの動きや見取り方が適宜示されるために、日頃から全体で共通理解をしながら指導をしている。

このように、日常的に特別支援教育と関わることのできる環境にあるために、職員の特別支援教育に対する意識は高い。

○ 特別支援教育支援員の効果的活用

本校では4人（児童数440人）の特別支援教育支援員が配置されている。これは、基本的に4年生までの普通学級に所属する支援を要する児童の指導に当たるよう配置されたもので、担任と支援員とが適宜打ち合わせをしながら指導しており、担任一人だけでなく複数の目でたいへんきめ細やかな見取りができる体制ができている。（平成24年度横手市全体としては、34人の支援員が配置されている）

○ 就学支援シートの活用

5歳児健診を中心とした健診時に就学相談員が相談支援を行い、「幼児ことばの教室」や療育施設と連携しながら、早期療育と就学支援をすすめている。また、保護者の同意を得ながら「就学支援シート（サポートファイル）」を作成して、小学校入学時には子どもの状況把握とそれまでの支援状況をもとにスムーズな支援ができるように該当校に届けられるようになっている。

3 本校における取り組み

(1) 生徒指導—「お互いのよさを認め、励まし合い、自分らしさを発揮できる子どもの育成」

～子ども一人一人の心の居場所ある学級・学校をつくる～

- 学習したことが誰にも分かり易く、安心して学べる教育環境をつくる。
- 品性ある子ども—ルールを守る。秩序ある学級—落ち着いて学習できる環境
- 違いを認め合う—縦割班活動など異年齢集団活動を通した豊かなかわり合いの場を設ける。
- 当たり前のことを当たり前でできる子どもを育てる。

(2) 学習指導—「ことばの教育三本柱」

※研究や環境のユニバーサルデザイン化

①授業改善の取組（読解力向上「ことば」の教育—授業改善・図書館教育の充実・NIEの推進）

- 研究の重点をふまえた授業スタイルの共通理解と共通実践
- めあてとゴールを提示し確認する。
- 学習の足跡で単元の流れを掲示する。
- 構造的な板書（見て分かる板書の工夫）
- ペアや3人での話し合いを取り入れる。
- 自分との共通点や相違点を考えながら聞き取る。
- 肯定的な評価をしながら
- 目標を毎月チェック—短期PDCAサイクルによって取組の改善充実を図る。

②図書館教育の推進

- 図書館環境の整備—誰でもいつでも好きな本を読めるように
- 図書を活用した単元などを年間計画に記載し、誰でも継続して実践できるようにしておく。
- 「ことばの教育」の取組を始めて今年で4年目になるが、平成20年度に一人平均年間6冊程度の図書貸出数が、今では一人平均年間110冊と劇的に増えた。

③NIE教育の推進

- 学校で新聞を取り、いつでも誰でも自由に見られるようにしながら学習に活用している。

- 図書活用と同様に、新聞を活用した授業を年間計画に記載して実践している。

(3) あきた型学校評価で家庭と一体となった取組の推進

- 生徒指導—「家族との触れあいを大事にする」—あいさつ・ノーゲームデー・家読
- 学習指導—「家庭の力も借りながら『ことばの教育』を進める」

4 おわりに

新しい特別支援教育が始まって7年目となるが、平成23年度調査によると、全国の「特別支援教育に関する研修を受講した教員数」は小学校で78%、中学校で65%となっている。校内委員会やコーディネーターの設置や事例研究会などの支援体制はほぼ整備されたものの、教員一人一人が特別支援教育に関しての理念をもち、一定の知識や技能を備えているかという点はまだ十分とはいえないように思う。

開始当初は研修や啓発活動が充実していたものの、最近ではずいぶん浸透してきたとはいえ、立ち上げの頃に比べると薄くなっている印象を受ける。昨今は、学力向上に向けた授業改善に主眼が置かれ、ともすると教材研究や指導案検討の時間が中心になりつつある。特別支援教育や情報教育等々幅広い内容の知識と指導力を身に付けていくことのできる研修を進めながら、児童生徒一人一人の特性に気づいてそれを見極める知識と子どもが何でつまづいているか気付く感性をさらに磨いていかなければいけない。そのためにも、研究や取組そのものもユニバーサルデザイン化して、全職員が同じ方向を向いて温度差なく取り組んでいくことができるようになる必要があると感じている。

また、「特別支援」が特別なものではなく、個に応じた指導のひとつであることを周知する上でも、保護者などに対する啓発活動を今後もしっかりと継続していかなければいけないと感じている。

そうすることによって、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が、ともにだれでも同じように教育を受けられる環境作りができると考えている。